







80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	◆水明インターネット句会◆ 令和六年十月
秋袷鏡の母に見つめらる	冬ざれや峡は深さを齡(よわい)とす	お仕舞ひを美津子ゆきけり志ん生忌	渡り鳥宵の空から声が降る	叡山に鐘の響きや朝寒し	かき分ける笑顔双子の乳母車	国境のどちらにも咲く秋桜	花の名を幾度聞く母秋桜	コンビニのおでんのふくろ野分あと	一掬の舌に広ざる新走	別腹の更に別腹秋渴き	斑鳩の鐘も床しき柿の秋	朝露を蹴散らしてゆく仔犬かな	うそ寒や見舞へば母の「どちらさま」	秋風や明日は家路の旅枕	まだまだと頑張る余生秋の蝉	昏れる庭明るさ保つ花芒	木の実満ち鳥がその木を基地とする	「美形なり」と言ふは空酔ひ冷まじや	毒茸の呼吸きらきら雨上がり	

100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	◆水明インターネット句会◆ 令和六年十月
長き夜や録画楽しもピーナッツ	いわし雲浮かびて消ゆる友の顔	茶を飲みて菊の節句を祝ひたり	霜降や今朝の沼田場は濁り立ち	沈む日を招き返すか薄の穂	爽涼や父母ヶ浜 <small>(ちちぶがはま)</small> の水かがみ	蜉蝣の骸を運ぶ秋の蟻	コスモスや子の連れ帰る風の色	母の真似指くるくると赤とんぼ	蔵出しの新酒の便りそろそろか	彼岸花の見ごろヴァチカン大使館	猫と子の寝る間に洗う障子かな	バス降りて茜さす坂うろこ雲	赤い羽根よじれやすきを仕舞いたり	星月夜となりの吾子のあごにひげ	立ち止まる猪瓜坊も立ち止まる	坪庭に鳥の賓客秋の雲	目路遙か黄金に染まる稲筈	偕老や六十年目の冬支度	老年のいま読む三島おけら鳴く	



												128	127	126	125	124	123	122	121	◆水明インターネット句会◆ 令和六年十月
												魔女二人通る改札ハロウィン	人生の余白少なし松茸買ふ	残月の都市を鴉の啼き合へり	ひよどりの鳴き声満ちて畑を去る	落柿舎に投句箱あり嵯峨の秋	ゆふぐれや木犀の香に染まりけり	快晴や金木犀の匂う朝	林檎むく個室の母のまくらもと	